

五色根は透明か

佐々木 閑

仏教は、唯識などの特殊な思想分野は別として、本質的に二元論である。つまり、この世の存在を、物質的領域と精神的領域に二分して考えるのである。阿含・ニカーヤ時代はおおまかに説かれていた、この物質と精神の二元的世界観も、アビダルマ時代になると体系化がすすみ、たとえば説一切有部の五位七十五法説といった精密な存在論へと発展していった。その二元論のうちの、外的な物質世界、すなわち色（ルーパ、rūpa）の領域は、さらに感官（インドリヤ、indriya）と、その感官によって認識されるべき対象（ヴィシャヤ、viśaya）に二分される¹⁾。

この、色、すなわち物質の領域に属する感官は、全部で5つある。眼根、耳根、鼻根、舌根、身根の5種である（身根というのは、触覚を生み出す皮膚感官を指す）。これに、精神的領域での唯一の感官である意根を加えると、それが、よく知られた「六根」と呼ばれる概念になる²⁾。本稿では、意根は除いて、物質領域に属する五根だけを取りあげて、その実体を考察していくことにする。五根は、色の領域なので、五色根ともいわれる。今回、本稿で考察する課題は、「五色根は透明か」という問題である。

五色根のうち、たとえば眼根を取りあげる。これは「視覚を生み出すための感覚器官」であるから、普通にいうところの「目」である。しかしそれは、解剖学的に言う「角膜」や「網膜」や「水晶体」や「視神経」などの器官が集合してつくる眼球そのものを指すのではない。眼球はあくまで眼根を支え保つための土台であって（これを扶塵根と呼ぶ）、眼根は、その眼球の中に入っている「なにものか」なのである。「眼球

には全く損傷がないのに、物を見ることのできない人」がいることを考えれば、このことは納得できる。もしも「眼球が見る」のであれば、眼球に損傷がなければ、必ず見ることができるはずである。しかし、眼球が完全でも、見ることができない人がいるということは、本当に見ているのは眼球ではなく、その内部に存在しているなにか特別な「もの」だ、と考えざるを得ない。それが壊れているために、見えないのである。現在ならばそれは、「神経経路や脳の障害のせいだ」と説明するところだが、そういった知見のなかったアビダルマ時代の人たちは、当然の論理的帰結として、「五色根は、実際に外側に現れている目や耳などの器官そのものではなく、その内部に存在している、感知することのできないなんらかの存在だ」と考えたのである。

その五色根はそれぞれが、眼の中、耳の中、鼻の中、舌の中に存在しているのだが、身根すなわち皮膚感官だけは、生き物の身体表面に広く分布していると考ええる。すなわち、生物体の表面をくまなく皮膚感官、つまり身根が覆っており、さらにその上に重なるようにして、眼根や耳根などが、局在している、という状態を想定するのである。³⁾ その場合、身根もまた、感知することのできない「なにか」なのであって、目で見ることができ、触ることもできる「皮膚」が身根なのではない、という点には注意しなければならない。その五色根が、どういう姿で存在しているのかを、代表的アビダルマ論書『俱舍論』を中心に見ていこう。

まず、五色根の成分がなにか、という問題であるが、その本質が「色（ルーパ）」であることに疑問の余地はない。五色根は物質である。しかし、その色というものが、どういう構造で存在しているか、という、さらに詳細な点にまで話が進んでいくと、次第にあいまいさが増してくる。

阿含／ニカーヤ以来、色は四大種および四大所造色によって構成されていると説かれている。すなわち、地・水・火・風の四要素（四大種）と、その四大種によって形成される二次的構成物としての四大所造色という、二つのレベルの要素から成るというのである。⁴⁾ そのうちの四大種

に関しては、「地界とは堅さである」という具合に、物質が持つ性質、状態だとする考えと、「地界とは髪や爪である」というふうに、具体的な個々の事物を指すとする考えが並立していた。説一切有部は、『婆沙論』の段階になって説の一本化をはかり、「四大種とは物質の性質のことであり、個々の具体的な事物を指すのではない」という説を主張した。そして、四大種が事物の性質だけを指すことになった結果として、それは眼で見ることのできない「不可見有対」なるもの（見ることはできないが、特定の空間を占有しているもの）とされた。四大種を我々が感じるための手段は、眼でも耳でも鼻でも舌でもなく、ただ触覚だけなので、四大種は、身根の認識領域、すなわち触処の中に含まれることとなったのである。

他方、四大所造色については、古来からの「四大種の合成によってできた物質」といった漠然とした意味が踏襲され、その具体的内容にまで踏み込んだ説明はなされなかった。ただ、おそらくは有部独自の創作経と思われる『雑阿含』第322経において、次のような説が登場してくる。

「五色根は四大所造の浄色で、不可見有対。色処（眼の認識領域）は四大所造で可見有対。声、香、味の三処は四大所造で不可見有対、触処は四大種および四大所造色であり、不可見有対である」⁵⁾

そしてこれが、有部における色法の基本原則となっていたのである。⁶⁾五色根に議論の焦点を絞っていく。⁷⁾

上の『雑阿含』第322経の文章中、五色根を説明する下線部の箇所を分かりやすく言うなら、「五色根は、四大種によって成り立っている物質であり、浄色なるものであり、物質として特定の空間を占めてはいるが、見ることのできないもの（不可見有対）」となる。これが、有部が考える五色根の概念のベースである。⁸⁾

アビダルマの発展とともに色の体系が整っていく中、そこへさらに、新奇なアイデアが二つ登場した。一つは色聚説（rūpasamghāta, kalāpa）。そしてもう一つが極微説である。⁹⁾

色聚説とは、「物質は、四大種や所造色の中のどれかひとつの要素からできているのではなく、必ず幾種類かの要素の集合体として存在する」という説である。そして極微説とは、「色法は極微という基本粒子から成っている」という一種の原子論である。この、色聚説と極微説の二説は、有部の場合、『婆沙論』の段階で、同時に、しかも一体化して現れてきたようである。そして、それが、従来の四大種、四大所造色と融合したかたちで『俱舍論』に引き継がれ、五色根に関しては、「五色根は、極微の集合体である四大所造色としての浄色であり、不可見有対である」という定義付けが確定してくるのである。¹⁰⁾

では、その、「極微の集合体である四大所造色としての不可見有対の浄色」とは、一体どういう姿をしているのか。まず、「極微の集合体である四大所造色」という語の意味だが、それについては、すでに別稿で図を用いて説明した。確認のためにその図だけ再録しておこう。¹¹⁾

図1は、欲界において、有情ではない、無機的な物質が生じる場合の最小の極微のセットを图示したもの。つまり、無機物が生じる場合は、最低でも、これだけの粒子がワンセットになって生じるということである。これに対して、図2は、欲界で、眼根を持つ有情が生まれる場合の最低限の粒子の組み合わせを表したもの。詳細は別稿を読んでいただき

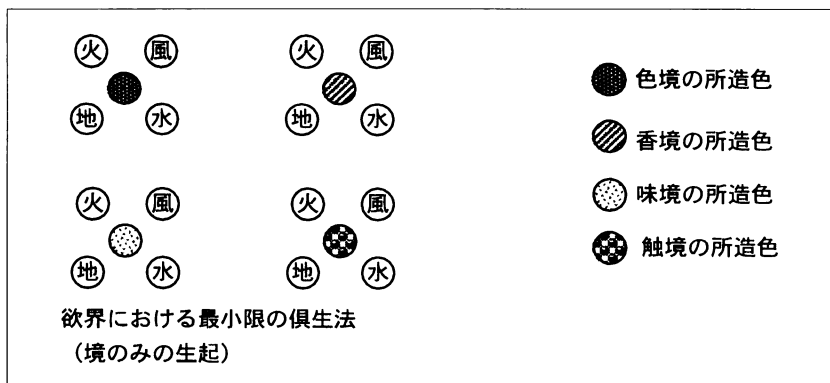


図1

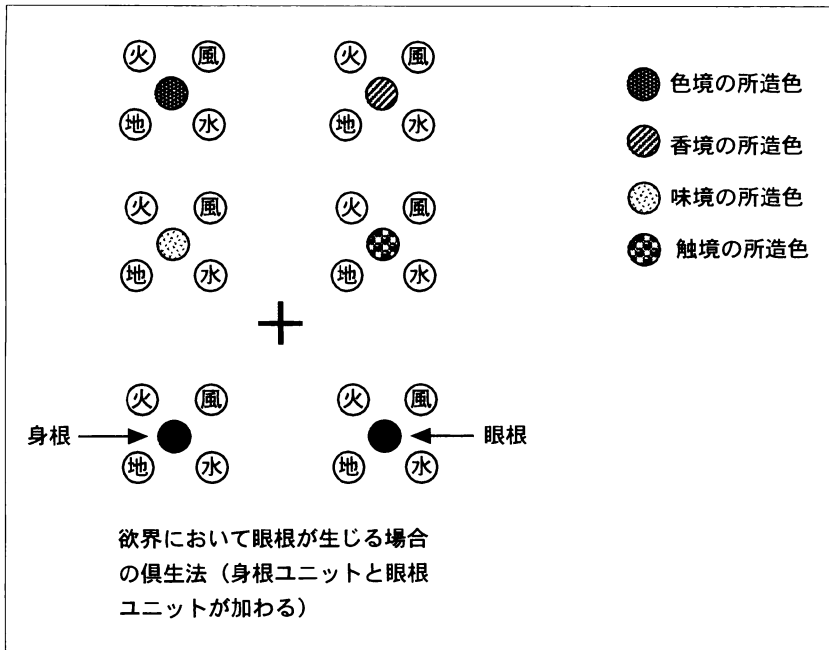


図 2

たいが、無機物のセットの他に、身根を含む1ユニットと、そして眼根を含む1ユニットが加わっている点に特徴がある。眼、耳、鼻、舌の各根が生じる時には、必ず身根が一緒に生ずることになっているので、「眼根が生じている」と言えば必ずそこには身根のユニットも存在しているのである。もちろん、身根だけは単独で生起することができるから、「身根しか具えていない生き物」がいるなら、その生き物の身根は、無機物のセットと身根のユニットだけの組み合わせとして生じることになる。

これが、「極微の集合体である四大所造色」である。私たちの身体でいうなら、全身の皮膚上には、「無機物セット+身根ユニット」が散在しており、さらに、目や耳などの器官の内部には、目ならば「無機物セット+身根ユニット+眼根ユニット」が、耳ならば「無機物セット+身根ユニット+耳根ユニット」が局所的に存在しているということになる。

ここで注意すべきは、「五色根そのものは、決して五識の対象にはならない」という点である。五色根とは、「対象を認識する肉体上の器官」であり、その五色根によって認識されるのが、五境と呼ばれる「認識領域」である。たとえば、眼根というものは、あくまで「見るための器官」であって、自分自身が対象として「見られる」ことはない。見られるのは、眼根の認識領域である「色境」、つまりいろやかたちを持つ視覚対象物だが、そこには眼根自身は含まれないのである。他の、耳根、鼻根、舌根、身根についても同じである。したがって、上の図でいうなら、無機物セットをつくっているすべての極微や、身根ユニット、眼根ユニットの土台となっている四大種の極微は、認識されて五識の対象となり得るが、身根、眼根そのものの極微は、いかなる方法によっても五識の対象として認識されることはない。それは「認識されるもの」ではなく、「認識するもの」なのである。『俱舍論』の極微説、色聚説から得られる、この条件を付け加えるなら、五色根の定義は、「極微の集合体である四大所造色としての浄色であり、不可見有対であり、そして、五識の対象として認識されることのないもの」ということになる¹²⁾。

五色根が、不可見有対であるということは、上述の『雜阿含』の文句によって確定することであり、一方、五色根が五識の対象として認識されることがないという点は、十二処、十八界といった古来の分類の必然的結果として導かれるものであるが、両者を融合すれば、結局は「五識の対象とはならないが、身体のどこかに確固として存在している物質だ」という一文でまとめることができる。したがって、上の定義を言い換えるなら、「五色根とは、極微の集合体である四大所造色としての浄色であり、五識の対象とはならないが、身体のどこかに確固として存在している物質である」ということになる¹³⁾。

そこで次に、この定義文中に現れる「浄色 (rūpapasāda)」について考察していく。prasāda は「清澄さ」「恩寵」「平穩さ」と言った意味を持つ語だが、それが五色根の状態を特徴づける語として用いられている。

rūpaprasāda は、漢訳では「浄色」と訳される。実際には「色の清澄さ」であるから「色浄」とすべきであろうが、「清浄なる色」という物質名詞の意味で用いられていることを汲んで、このように訳されたものと思われる。パーリでも pasāda が、「感官」の意味で用いられている例が見られる。たとえば Samantapāsādikā 507ページでは、悪業により、巨大な骨鎖となって生まれた者が、鳥につつかれて恐ろしい痛みを感じるという記述において、pasāda は、「感覚器官」の意味で用いられている。それが膨れあがるので、一層痛みを感じるという設定である。

では、浄色とは、どのような状態を意味しているのでしょうか。例えば、桜部建は、その翻訳の中で、それを「透明清浄な色」と訳す。prasāda は、「透明な状態」だと理解するのである。その理由は、おそらく、五色根が「不可見有対」つまり「目で見ることのできないもの」だからであろう。「透き通っているから、見ることができない」と想定するのである。一方、ド・ラ・ヴァレー・プサンはそれを、éléments matériels subtils (微妙な物質的要素) と訳していて、「透明」とは考えていない¹⁴⁾。平川彰も、「[浄色]とは、微妙な肉体であるという意味である。…略… 鏡面がものを映ずるように、眼球の中に外界を映し出す微妙な肉体があり、それが視る作用を持つと考えたのである。」と言って、そこに「透明」の意味を考えない¹⁵⁾。

つまり、五色根が目に見えないものだということが誰かが認めるが、その理由が、「透明だから見えない」のか、「それとは別の理由で見えないのか」という点で意見が分かれているのである。それを確定するために、『俱舍論』の記述をみていくことにする。

- 『俱舍論』界品43-44偈 Pradhan 本 初版 pp. 33-34, 桜部訳 pp. 228-229. (同じ記述が『婆沙論』大正27, 63aにある)

1. 眼根の極微はまず、瞳の中に、アジャージーの花のように配置されている。しかし透明な皮膜で覆われているので、分散するこ

とはない。他の人々は、「上下に重なり合って団子のような形に配置されている」と言う。そして、水晶のように透明であるから互いに他を覆障することはない。

caḥsurindriyaparamānavas tāvad akṣitārakāyām ajāḥīpuṣpavad
avasthitāḥ. acchacarmāvacchādītās tu na vikīryante.

adharauttaryeṇa piṇḍavad avasthitā ity apare. na cānyo 'nyam
āvṛṇvanti sphaṭikavad acchatvāt.

2. 耳根の極微は耳の穴の中に配置されている。

śrotrendriyaparamānavo bhūrjābhyantarāvasthitāḥ.

3. 鼻根の極微は、鼻孔の内部にシャラーカー（簪）のように配置されている。

ghrāṇendriyaparamānavo ghaṭābhyantareṇa śalākāvāt.

これら初めの三根は、華鬘のように配置されている。

ādyāni trīṇindriyāṇi mālāvad avasthitāni.

4. 舌根の極微は半月のように配置されている。伝え聞くところによると、舌の中央では、毛の先端ほどの量、舌根の極微がゆきわたっていないところがあるという。

jihvendriyaparamānavo 'rdhacandravat. vālāgramātram kila
madhyajihvāyām jihvendriyaparamāṇubhir asphuṭam.

5. 身根の極微は、身体の形状に沿って配置されている。

kāyendriyaparamānavo kāyavad avasthitāḥ

1の眼根に注目する。眼根の極微は、アジャージーの花のように配置されている、という。アジャージーとはクミンのこととされている。クミンの花の実物を見たことはないが、瀧川郁久氏が私信で送って下さった写真を見ると、細かい粒状の花が放射状に並んでいる。したがって、眼根の極微は、瞳の表面に放射状に配置されていると考えているのであろう。そして、それが瞳の表面に点在しているのに、分散してとんでい

ってしまわないのは、その表明を透明な (accha) 皮膜が覆っているからだという。この膜が透明でなければならぬのは、眼根がその膜を通して物を見る以上、そこを光が通過できなければならぬからである。それが透明でないとすると、眼の前に遮蔽物があれば、その向こう側が見えなくなるのと同様に、眼は外界物を一切見ることができなくなってしまうであろう。一方、これとは違って、眼根の極微は、ひとつかたまりの団子のようになって瞳の中に置かれていると考える者もいる。この場合は、先の説のように、個々の極微が点々と配置されているのではないから、飛び散ってしまうという心配はない。全部が固まってしっかり固定されているというイメージだと思われる。しかし、その代わりに、「重なり合って団子のようにになっているなら、後ろにある眼根は、前の眼根が邪魔になって、外の物を見ることができないではないか」という疑問が生ずる。それに答えるのが最後の説明で、「個々の眼根は透明である (accha)。だから、前の眼根が後ろのものの邪魔になることはない。したがってすべての眼根が、等しく外界を見ることができるのだ」と主張している¹⁷⁾のである。

もし、眼根が、もともと透明な物質として理解されていたなら、このような理屈をわざわざ持つてくる必要はない。五色根が透明だとは考えられていないからこそ、このような議論が必要なのである。眼根は目で見たり手で触ったりして認識することはできないが、だからといってそれが、透明だとされているわけではないのである。また、ここに「透明」という意味で accha という語が現れている点も重要である。透明という意味を表す語は、prasāda ではなく、accha なのである。accha について『俱舍論』での他の用例を見てみよう。

1. 「界品」第36偈の長行 (Pradhan 本 初版 p. 24, line 23; p. 25, line 2)
「五色根は、宝珠の光のように accha なので (maniprabhāvad acchatvāt), なにかを切ることもないし、焼かれることも量ることも

ない」と説く。この記述から、accha というのは、単に色彩的に「透明」という意味ではなく、抵抗性なく「素通りする」といった意味合いを含んでいることがわかる。

2. 「根品」第12偈の長行 (Pradhan 本 初版 p. 46, line 26)

色界に苦根がない理由。「色界では、拠り所(身体)が accha であること、及び、色界には、苦果を生む不善がないことによる」。ここでも、単に「透明」では意味がとおらない。ここも「素通り」と訳すと意味がでる。

3. 「世間品」第13偈の長行 (Pradhan 本 初版 p. 123, line 24)

中有の説明：地獄に向かう中有は、地獄の有情の形をとる。そうすると、胎内にあって死んで、地獄へと向かう有情は、地獄の有情と同じように燃え上がるから、母胎を焼くのではないか、との疑問に対する答。1. 地獄の有情であっても、常に燃えているわけではない。2. 中有は accha なので、触れることがないから、母胎を焼くことはない。ここでも accha の意味は「素通り」¹⁸⁾である。

4. 「世間品」第51偈の長行 (Pradhan 本 初版 p. 160, line 14)

八山の間七海の水の特性として、冷たい、甘いなどと並んで、accha である、とされる。「飲んで身体に優しい」ともあるので、「素通り」の意味はない。これは、水の素晴らしさを示す特性であるから「透明」と理解すべきであろう。

5. 「定品」第3偈の長行 (Pradhan 本 初版 p. 434, line 17)

無色界の有情にも多少の色はあるという説への批判。「もし無色界の有情は身体が accha だから、わずかな色がある、というなら、中有や色界繫の有情も身体は accha だから、彼らも無色界だという矛

盾になってしまうだろう。もしも、無色界の有情よりも accha な者はないので、その意味で、わずかな色があるというなら、無色界にもレベル差があることになるから、有頂だけが無色だということになってしまう」。ここは、上の 2, 3 を受けた議論になっている。中有や色界の有情が「透明だ」とはされていないから、ここも「素通り」の意味にとるべき。また、この箇所に対する称友疏によると、「中有や色界繫の有情も身体は accha である」という『俱舍論』の内容に対して、「彼らは accha なので、金剛の諸山の中をも障礙されずに行く」と註釈している。明らかに「素通り」との理解である。¹⁹⁾

このように、大方は「素通り」の意味だが、海の形容詞のように「透明」という意味で用いられることもある。五色根の形状の場合は、極微が散り散りにならないように覆っているカヴァーが accha だといっているから、素通りではおかしい。光が素通りするという意味で、「透明」の意味に理解すべきであろう。

以上の考察により、五色根は本来、透明な物質として考えられていたのではないということが分かる。したがって、ド・ラ・ヴァレー・プサンや平川彰の解釈を採用すべきである。五色根は、先の図のような極微の組み合わせとして存在し、その中の根の極微は、「透明なものではないが、浄色であり、認識することのできない物質」なのである。²⁰⁾

では、浄色とはなにを意味するのか。それについては、平川彰のいう、「鏡面がものを映ずるように外界を映しだす、微妙な肉体」という理解が妥当と思われる。これは、南方パーリ仏典によって得られる解釈である。その点を、少し詳しく見ていこう。関連情報が出現する資料は、『清浄道論』(Visuddhimagga) 以降の文献である。

1. 『清浄道論』(PTS 本) p. 444

「眼は、まさに色に接触すべき種浄を相とし (rūpabhīghātārahabhūta-ppasāda-lakkhaṇaṃ), または、見ようと欲することを因縁とする業によって等起した種浄を相とする (daṭṭhukāmatānidānakammasam-utthānabhūtappasāda-lakkhaṇaṃ)。」(以下、身根に至るまで同様)。この種浄 bhūtappasāda とは、有部がいう rūpaprasāda と類似の概念だと思われる。

2. 『清浄道論』(PTS 本) p. 445

「眼根とは、世人が「眼」と呼ぶところの眼球の、黒い球の前面中央で、前面に立った人の身体が映る場所にある、蚤の頭 (ūkāsira) ほどの大きさのものである」。眼根は、「前に立った人の姿が映るものだ」とされている。「透明」ではなく、「映る」のである。

3. 『清浄道論』(PTS 本) p. 450

「眼などの五種は、色等を捉える縁として鏡面のように明浄なので (ādāsataḷaṃ viya, vipasannattā), 浄色 (pasādarūpa) である。その他は、これと逆なので、非浄色である。」「鏡面のように明浄」というのだから、透明という意味ではない。外界の姿をありのままに映し出すものとしてイメージされている。

4. 『法聚論』の注釈書 Atthasālinī (PTS 本) pp. 306-308

有資糧根 (有部でいう扶塵根, sasankhāracakkhu) と眼浄 (有部でいう勝義根, pasādacakkhu) の説明。詳細に語られるが、眼浄の説明は、上の『清浄道論』p. 445と³¹⁾同文。

5. Abhidhammatthasaṅgaha (JPTS, 1884), pp. 27-31

Rūpa-saṅgaha-vibhāga の冒頭に、色、大種、浄色に関する説明があ

って、ここに対する Abhidhammatthavibhāvanī の註釈は、五色根の形状に関して、『俱舍論』と同じスタイルの説明を与える。以下、要点だけを記しておく。²²⁾

- (1) 眼，耳，鼻，舌，身を浄色 (pasāda-rūpa) という。
- (2) 眼の浄色は瞳孔の中にあり，蚤の頭ほどの場所に無数に散在している。
- (3) 耳の浄色は耳孔の中にあり，指輪の形をした所に生えている微細な赤毛の根本に散在している。
- (4) 鼻の浄色は鼻の中の山羊のかたちをした所に無数に散在している。
- (5) 舌の浄色は舌の真ん中にある，蓮の花弁の形をした所に無数に散在している。
- (6) 身の浄色は消化熱，毛髪，体毛，爪，いぼなどを除いた身体全体に俱生色とともに無数に散在している。
- (7) 身浄色と，他の浄色との関係：眼浄色などの依止する大種と，身浄色の依止する大種は異なっている。つまり，眼浄色などの依止する大種には，身浄色は依止できないので，両者が同一処に同じように散在していても，互いに融合してしまうことはない。

パーリ文献の以上の記述の中には，pasāda を「透明」という意味で用いる例はない。pasāda はあくまで，「対象をありのままに映し出す清澄さ」を意味している。有部，パーリのどちらの系統においても，五色根が本質的に透明であると考えた方向性はなかったということになる。五色根は，prasāda であることによって「外界をありのままに映し出す」のであって，pasāda であることによって「認識され得ない」というわけではないのである。したがって，五色根自体を認識できない理由は，それが prasāda (pasāda) だからだということにはならない。五色

根が「目で見えない」あるいは「五識の対象にならない」のは、あくまでそれが「根」であって「境」ではない、つまり、「認識する器官」であって「認識される対象物」ではない、という抽象的区分に理由があると考えられる。最後に、「信 (śraddhā)」を「水を清澄にする宝珠」に喩える譬喩表現について私見を述べておきたい。²³⁾

この表現での「水の清澄さ」は prasāda という語で表される。それは、泥やゴミで汚れた水が、その宝珠の力で清らかになった様を言うのであるから、「透明になる」と言っても構わない。ただ、今見てきたように、prasāda が、本来「ありのままに映し出す」という意味合いの強い語であることを考えるなら、ここでの清澄さは、透明性よりもむしろ鏡面としての反射性が強く出ていると考えるべきではないかと思う。泥やゴミのせいで、上からのぞき込んでもなにも映ることのなかった水が、宝珠によって澄み渡ると、自分の顔などの外界物がありのままに映る清らかな水面に変わる、そういう状況を指しているのではないかと思えるのである。

註

- 1) その他に有部では、「無表色」と呼ばれる特殊な物質を想定する。それは、認識器官でもなく、また、認識器官によって認識される対象物でもない、言ってみれば「全く認識とは関係しない、あたかも存在しないかのようなかたちで存在している物質」である。しかし、この無表色は、我々が行う様々な行為の影響力を保持する、「保存庫」のようなものとして働くのである。『俱舍論』第4章「業品」で詳説されている。
- 2) 現在では、肉体的感覚は、上の五感の他に、耳の内部で感じる「平衡感覚」も含めるのが一般的である。
- 3) 身根が特別であることは、『俱舍論』第2章「根品」第22偈の長行部分で示されている。肉体を持つ有情が生まれる場合、身根は必ず生ずるが、眼、耳、鼻、舌根は、ない場合もある。そして、眼などの四色根が生ずる場合は必ず、「身根プラス、その当該の根」というかたちで生ずる。なお、『俱舍論』のこの箇所の漢訳には、梵文原典にない説明文が一文加わっている。内容は、「眼、耳、鼻、舌根は必ず身根と共にあり、しかも、眼、耳、鼻、舌根は、各々別個のもので、別々の場所に生ずるものであるから、身根プラス当該の根という形で生ずるので

ある」というもの。(大正29巻, 18b)

- 4) 仏教における色法の展開に関しては、以下の研究を参照のこと。水野弘元「仏教における色(物質)の概念について」『宇井博士還暦記念論文集・印度哲学と仏教の諸問題』, 1951, pp. 479-502 (『水野弘元著作選集第二巻 仏教教理研究』, 春秋社 1997, pp. 343-363に再録); Y. Karunadasa, *Buddhist Analysis of Matter*, 2nd Edition, Singapore 1989; 浪花宣明『パーリ・アビダグマ思想の研究』, 平楽寺書店 2008, pp. 102-185.
- 5) 大正2巻, 91c.
- 6) さらにここへ、「不可見無対」という新たな概念が追加され、それが無表色だということになったのである。
- 7) 水野弘元「根 Indriya について」『印度学仏教学研究』, 第14巻第2号, 1966, pp. 39-46 (『水野弘元著作選集第二巻 仏教教理研究』, 春秋社 1997, pp. 207-217に再録); 桜部建「無上の弁証」第五章「物」, 桜部建・上山春平『仏教の思想2 存在の分析〈アビダグマ〉』, 角川書店 1969, pp. 76-89. その83ページで、根を「四元素の特殊な変化であり、見る・聞くなどの機能を有する一種の透明清浄で目に見えない、しかし空間を占有し他ものが同時に同一空間に存在することを妨げる、物であるという」と述べている。
- 8) 『法蘊足論』(大正26巻, 498b), 『品類足論』(大正26巻, 692b): 「眼根とは、四大種所造の浄色である」
- 9) 有部アビダグマでいう rūpasamghāta 説と、パーリの kalāpa 説は類似しているが、これを同一視するか、あるいは違ったものとみるか、研究者の意見は分かれている。Karunadasa, *Buddhist Analysis of Matter*; 浪花『パーリ・アビダグマ思想の研究』, 平楽寺書店 2008, pp. 102-185.
- 10) 『俱舍論』第1章「界品」の第9偈および第29偈の長行
- 11) 佐々木閑「有部の極微説」『印度学仏教学研究』第57巻第2号, 2009, pp. 926-932. この図で示しているのは、あくまで『俱舍論』が語る色の集合体である。これとは異なる見解が『婆沙論』→『順正理論』の系列に存在していることは十分承知しておかねばならない。
- 12) 「無機物セットをつくっているすべての極微や、身根ユニット、眼根ユニットの土台となっている四大種の極微は、認識されて五識の対象となり得る」といったが、極微は、多数が集合してはじめて認識の対象になるとされているので、これらも単一で認識の対象になるわけではなく、それらが多数集合している場合に、五識の対象になるという意味である。それが、どれくらいの量、どういった形態で集合したら、認識の対象になる得るのか、という点は不明。
- 13) 「五色根は目で見ることができると」という説を主張した部派もあったという。Kathāvatthu (PTS 本) pp. 332-333. プッダゴース注によると、アンダカ派の説とされている。
- 14) Louis de la Vallée Poussin, *L' Abhidharmakośa de Vasubandhu*, Tome I, p. 15.

- 15) 平川彰「原始仏教の認識論」『講座仏教思想』第二巻「認識論・論理学」, 1974 (『平川彰著作集第2巻 原始仏教とアビダルマ仏教』, 春秋社 1991, pp. 307-344に再録), p. 335.
- 16) V. Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, 1957, p. 32.
- 17) 「そして、水晶のように透明であるから互いに他を覆障することはない」という最後の文は、サンスクリット原典によれば、「他の人々」の言葉ではなく、世親による説明である。しかし桜部の注によると、チベット訳はこの文も、「他の人々」の言葉と見ている。しかしいずれにしろ、この文は、「他の人々」の説のいう、団子の如き眼根の極微が、なぜ互いに覆障することがないか、その理由を語るものであることは間違いない。
- 18) 山口益, 舟橋一哉『俱舎論の原典解明 世間品』1955, pp. 113-114では、「身体が澄浄 (accha) なるが故に、見られ得ざるが如くにまた触れ得ざるをもって、これは難たるに相応せず」となっている。文意がとりにくいが、梵文の構造およびヤショーミトラの注から見て、「見られないと同様に、accha なので、身体が触れられることもない。だから批判にならない」と読むべき。
- 19) 櫻部建, 小谷信千代, 本庄良文『俱舎論の原典研究 智品・定品』, 2004, pp. 216-234.
- 20) もちろん、瞳の中の眼根を団子の塊と考える「他の人々」は、少なくとも眼根の極微に限っては、それを透明物質と考えていたことになる。
- 21) 佐々木現順『仏教心理学の研究 アッタサーリニーの研究』, 1960, pp. 515-517. *Abhidhammāvatāra* (PTS 本), p. 66も参照。
- 22) *Abhidhammatthavibhāvanī* の校訂本が未入手のため、ウ・ウェプツラ・戸田忠の和訳を利用した。ウ・ウェプツラ・戸田忠『アビダンマツサンガハ 南方仏教哲学教義概説』, 1980, pp. 177-178.
- 23) このテーマに関しては、Takatsugu Hayashi, “The *Vimuttimaggā* and Early Post-Canonical Literature (I)”, 『仏教研究』第31号, pp. 92-95, および関連の注を参照。

本稿は平成20年度科学研究費補助金（基盤研究（C））の成果である。